

【開催日時】 2018年6月23日(土)13:00～16:30 【会場】 東京都生協連会館 3F 会議室 1

【参加者】 16名

【交流内容】

1. 学習会

①首都直下型地震に消費者は如何に備えるか

国際農林水産業研究センター 研究戦略室 室長 土居 邦弘 氏

- ・食の外部化が進行している現代。家庭内備蓄率の低下は止められない流れ。
- ・備蓄と災害発生時の生産急増に対応できる食材（主食）として「米」の価値。再評価。
- ・首都直下型地震被災者 1700万人想定。従来の大規模被災に対する政府の調達力を分析。
- ・被災地ごとの食料需要の変化とその原因分析。需給逼迫の背景と買い占めの状況。
- ・生産地（稼働工場）での最大限増産を支える体制確保と原料調達力の維持。しかし現実には？
- ・個人の備え… 基本的に1週間分（うち3日分は水・熱不要なもの）。燃料（コンロ用ガスカートリッジ）も1週間分。米中心の食事。アレルギー対応食などは必ず備蓄。被災地以外でもまず備蓄品から消費し、買い占めをせず、増産・流通分は被災地に集中させる配慮が必要。

②日本における災害時の食のリスクと日本災害食学会の取り組み

一般財団法人都市防災研究所 上席研究員 日本災害食学会副会長 守 茂明 氏

- ・日常食の延長線上にあり室温で保存できる食品・飲料はすべて災害食となりうる。
- ・家庭内・企業内備蓄が広がっても、物理的限界はある。
- ・食品ロス（廃棄量が膨大）を、災害食として活用できないか研究中。
- ・あわせて「郷倉（ごうぐら＝地域ごとの公共貯蔵施設）」を想定し具体化へ向けた研究中。
（平時は市内の学校給食を生産・配給する福生市防災食育センターの事例紹介）
- ・備蓄食材で、避難者一人一人に配慮した食づくりを行える地域の担い手（運営者）づくりが課題。
- ・講義の中で日本災害食学会の認証食について紹介。

2. これらを受けて意見交換・課題共有をしました。

- ・改めて家庭内備蓄のポイントとその背景について理解を深めることができた。
- ・備蓄食品についての質問があり、消費期限をずらしながら日常的に消費・購入を繰り返すローリングストック方式を推奨する旨の説明があり共有した。
- ・食品流通における1/3ルールの見直しは、食品流通業・消費者組織の両機能をもつ生協として関心を持つべき課題として提起いただけた。
- ・生協では、災害時の物流調達機能は全国規模の連携を含めて構築しつつある。生協の事業的機能・社会的役割について、それぞれのご研究の中で分析・提言いただけることがあるのではないか。
- ・郷倉において「配慮できる運営者」を周辺住民が担う想定があるなら、生協組合員も候補の一つに



なる可能性も共有した。(可能なら郷倉としての福生市防災食育センターの視察に参加したい。)

- ・企業の取り組みとして、キリンにお勤めのIさんから、災害時の自動販売機の解放や、ビールに使う水の提供などの紹介があった。

3. 休憩タイムを利用し、非常食のデモンストレーションを行い、全員で試食し楽しみながら交流しました。

(原案レシピ提供：コープ災害ボランティアネットワーク)

- ・ポテトスナックとコンビーフのカナッペ。(じゃがりこお湯をシール袋に入れ、もみほぐしてコンビーフとマヨネーズを加えて、クラッカーの上に乗せてカナッペにする)



4. 前回からのテーマであった「まち調べ」について、報告・交流しました。

中野区	中野周辺の歴史から紐解き、現在の課題である高齢化率の高まりの中で、住民の緊密なコミュニケーション、行政との連携で活発に活動する町会の姿、いきいきと多くの参加を広げたイベントの様子について具体的に報告があった。(TIさん)
新宿区	社会福祉協議会、子ども総合センター、子ども家庭支援課など福祉関連の窓口で、「区の次世代施策」についての情報不足が感じられ、行政サービス上の課題が見えてきたことを報告(KSさん)。
青梅市	特に高齢者に対する悪質な訪問点検・販売、特殊詐欺の横行を警戒し、行政、農協などから注意喚起を広げている状況や、複数の保育園が共同運営するカフェ、個人が運営する子育ての居場所づくりの事例について報告があった(FSさん)。
文京区	「こども宅食」「千石たまご荘」「千石こじゃり」「おたがいさま食堂千石」などの自主的地域活動とその連携関係などをはじめ、運営内容に踏み込んで、千石こじゃりの防災教室「あそ防災」について具体的な説明があった(SNさん)。メンバーのEKさん、JHさんが見学の様子や感想を紹介。
江戸川区	消費者センター、区環境部、社会福祉協議会、「なごみの家(地域ささえあい活動拠点)」、女性センターなど自治体の各機関を訪ね、取り組みを聞き取り、暮らしの安全を担う機関が「環境部」となっていることへの違和感なども報告された。また、EKさんが「なごみの家」にボランティア登録して活動を始めていること、一般経営カフェでの「こども食堂」開催事例を紹介された(JHさん、EKさん)。
横浜市 青葉区	エリアイメージとは異なり、急速に高齢化と経済的格差の極大化が進行している地域において、住民が感じる課題と行政の認識を紹介、内部化する家庭のゆがみや、子ども食堂の展開が比較的遅れている現状について報告があった(HT)。
日野市	「警察署管内振込め詐欺撲滅掲示板」が金融機関の店頭設置され、発生状況をリアルタイムに伝え注意喚起を促す取り組みや、地域のたまり場の展開状況、高齢者への「気かけ」運動について報告があった(HAさん)。
府中市	府中市社会福祉協議会による冊子「わがまち支えあい協議会」について紹介と報告があった(MKさん)。

出席はされませんでした。Iさん、Mさんから資料提供がありました。

- ・杉並区の「きずなサロン」と子ども食堂
- ・もっと知りたい近現代史～明治150年の真相
- なおこれとは別に、Aさんからは「消費者団体訴訟制度創設から10年」の振り返りや、適格消費

者団体の活動状況などについて資料をもとに紹介されました。

また、Kさんから「種子法」の問題点について報告がありました。

5. まとめ

- (1) 学習会では、「災害食」についてデータに基づいた食料需給分析と、直前に発災した大阪の地震も踏まえ、備えるべき食料の種類や燃料の適切な量などについて学び、日常の中でできる備蓄のあり方についてあらためて学習することができました。被災地外でも起きる「買い占め」が被災地への物資集中に与える負の影響についても認識を新たにしました。

日本災害食学会認証規格「災害食（マーク）」の認定基準やしきみ、福生市防災食育センターの機能等について質問がありました。

参加メンバーの多くが過去の災害支援を通して学んだ備えのあり方と、「災害食」の考え方に関連してさらに深める機会が今後必要であるとの認識で一致しました。

- (2) まちしらべの交流では、各地域で広がりを見せる「子ども食堂」を巡ってさまざまな議論がありました。地域の実情を反映したものとなっているものの、他の地域から見えてくる課題もあり、さらには、災害時の食の拠点になりうるという新たな視点も加わり、今後も継続したまちしらべの課題であることを共有しました。まちしらべのプロセスで感じた、行政対応の不十分さも情報として整理し、消費者市民社会の実現にむけた取り組みとしたいものです。



- (3) 東京都生協連の防災担当も参加し、都連が備えている非常食の紹介がありました。今回はアスコンメンバーへの参加も呼び掛ける中で、3名の方に参加いただき、貴重なご意見いただきました。今後も連携して取り組めることを広げていきたいと思えます。
- (4) グループの運営上、連絡や資料準備などで課題を残しました。今後の話し合いを踏まえ、メンバー間の協力を強める方向で、提起が必要です。

6. 次回に向けて

- (1) 次回の日程会場は、2か月後を目途にあらためてメールで呼びかけ集約することとしました。
- (2) まち調べの課題は、今回のみに終わらせず、各自が継続して取り組み、報告・交流をはかっていきます。

7. 懇親会など

東京都生協連よりコーヒーの提供があり、また有志からお菓子や飲み物の差し入れがありました。ASCONメンバー、講師含めて10名が参加し、近隣の料理店にて17～19時頃まで開催しました。

以上